

作者・縄文土が訪ねるジョンとヨーコの軌跡

## 軌跡3「風」

### ロンドン・リヴァプール探訪記 ～ジョンの風を感じて～

本作のメインキャラクターであるダディのモデルとなったジョン・レノンと、彼が属していたザ・ビートルズ(作品中は“FAB4”)の軌跡を、英国のロンドンからリヴァプールへと訪ねたりレポートです。プロデューサーであり原作者、さらに劇中オリジナルソングも創作した縄文土が現地の風を実際に感じて本作に吹き込みました。

#### ① ロンドン LONDON

2018.10.21 日

■2018年10月21日朝、英国・ロンドンに着き、そのままラディソンホテルに向かった。朝7時、英国美術館近くのラディソンホテル前から2階建てバスに乗った。いよいよ英国でジョン・レノンとビートルズの軌跡を訪ねる旅がスタートする。

最初の目的地は、メイソンヤード9街区にある「インディカギャラリー」跡。そこに続くトンネルで、オノ・ヨーコ似の似顔絵を見つけ、誘われるようにたどり着いた。



■今は名前を「ジェームス ハイマン ファイン アート」に変えて残っているが、この場所こそ、1966年11月9日、オノ・ヨーコが開いていた個展に偶然、ジョン・レノンが訪れ、二人が出会った場所だった。その日、ジョンが降りていった階段をのぞき込んだ。まさにそのときの彼の足音が聞こえてくるようだった。

■次はサビルロウにある旧アップル社ビル。ここで、ビートルズ時代のジョン・レノン最後のライブパフォーマンスが行われた。玄関に立ち、思わずジョンを真似てエアギターを弾いた。屋上から、彼が弾く「One After 909」のギターの色音が聞こえてきそうだった。それは、ジョンとポールが出会った後に初めて作った曲だった。



■1964年のビートルズ初の主演映画「ビートルズがやって来る ヤァ! ヤァ! ヤァ!」の撮影が行なわれたメルルボーン駅に行く。この駅で4人が追いかけて駆け込むシーンが撮影された。ポールは新聞紙で顔を隠してファンの目を逃れた。そんなシーンを思い出した。アップル社からメルルボーン駅へ、私はビートルズ最後の時代から、誕生間もない頃までの時をかけた。



■ビートルズのデビューアルバムから最後のアルバムまでを録音したアビーロード・スタジオ。その壁には、「Imagine」の歌詞が掲げられていた。ジョンが壁にサインし、このスタジオへの階段を降りる姿を想った。



1969年9月26日発売されたビートルズ12作目のアルバム「Abbey Road」のあの有名なジャケットで横断歩道を歩くジョンのように先頭を切って歩いた。

■1969年3月、ジョンとヨーコが結婚し、最初に暮らしたフラットの前にやって来た。二人の部屋は、公園の前の郵便ボックスの前にあった。二人はここで、公園を眺めながら毎朝、食事をして出かけ、夜に帰った。



■ソーホーにあるブルワーストリートに来た。そこにはビートルズのアルバム「Let It Be」のレコーディングが行われたトライデント・サウンド・スタジオがあった。当時、喧嘩をしていた4人はここに集まって、恐らくそこにはヨーコの姿もあったに違いない。ちなみにここでは、T・レックスやデヴィッド・ボウイ、クイーンもレコーディングをしている。そんなソーホーには、アーティストのいたずら書きがたくさんあって飽きなかった。



■私は、建ち並ぶ楽器店のショーウィンドウに、ジョンが弾いていたのと同じ黒のリッケンバックカーを見つけた。空に立ち上る飛行機雲が美しかった。まるで、その後の“奇跡”を予感させるように。



■その夜、私はオックスフォード・ストリートにあるロンドン・パラディウム・シアターの前に立っていた。そこは、1963年10月13日ビートルズが当時の国民的人気番組だったサンデー・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアムの生放送でライブを行った場所だった。約1500万人がテレビの前で熱狂した。



## ② リヴァプール LIVERPOOL

2018.10.22 月

■翌10月22日の朝8時、通勤客でごった返すユーストン駅にいた。若い頃のジョンは、一度もリヴァプールを出なかったというが、「One After 909」の列車に何を思い描いていたのだろうか。そんなことを考えつつ田園風景を眺めながら2時間、そして私は、ジョンが生まれたリヴァプールに着いた。リヴァプール駅前は、昔は薄汚れた感じの陰気な街だったそうだが、近年近代化が進み、駅舎もガラス張りになり、カラフルな壁面のビルや斬新な設計の建物が増えている。



■世界でもオンリーワンのビートルズをテーマにしたホテル、「ハード・デイズ・ナイト・ホテル」にタクシーで着く。外壁にまで、ジョンの銅像が飾られていた。中に入ると、ジョンの胸像が出迎えてくれ、フロント周りや階段はすべてビートルズの写真で埋め尽くされていた。





■ここで、この旅の最初の軌跡が起きた。フロントでチェックインの際、「ところでピアノのある部屋あるといいけど・・・」と聞いたら、何と3年先まで予約でいっぱいだというジョン・レノスイートに偶然キャンセルが出て、グレードアップで泊まることができたのだ。**MIRACLE1**



■ドアを開けるとそこには、ジョン・レノンの世界が広がっていた。思わずジョンと一緒に写真を撮った。ライティングデスクで、ジョンのポエムを読むうちに、思わず涙が頬を伝わった。いつの間にか部屋の片隅にあったピアノに座り、ジョンの曲を弾いていた。



■寝具からブーツまで、とにかくビートルズであふれていた。



■ホテル横には、ビートルズ時代に1日7回、ステージを行ったザ・キャバーン・クラブがあった。入り口には、ジョンの等身大の像があった。私はポケットに手を突っ込んで、1961年当時のジョンと同じ格好をした。



■店の前で、スウェーデンから来たという、ビートルズマニアの女性と会って、少しばかりビートルズの話をした。その夜、ホテルのバーでストロベリー・フィールズという名のカクテルを飲んで、少しばかり酔い、ベッドに潜り込み翌日の奇跡を念じながら本を読んだ。



2018.10.23 火

■翌朝、マジカルミステリーツアーのバスで、ビートルズの4人が暮らしたリバプール市内のツアーへ出かけた。



■4人が教会や床屋に通って普通の日々を過ごしていたバス通り、ペニーレインを訪れた。4人が通ったこの床屋で、あのマッシュルームカットが生まれたのだ。当時そのままに残された1階の店内で、鏡の前に立った。



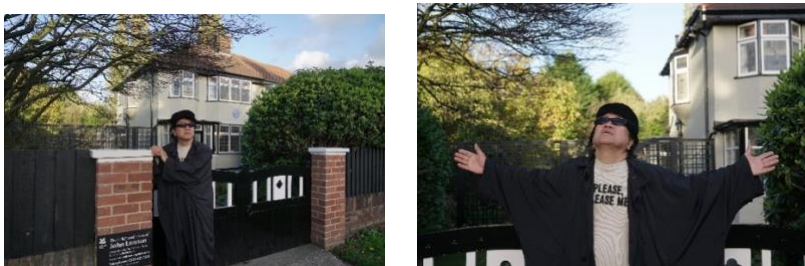
■ペニーレインの手前には、ジョージの実家があった。しかし、リンゴの実家は解体中だという。偉大なビートルズの4人でさえも、いつか歴史の波に消えていく存在かもしれない。「Strawberry Fields Forever」のモチーフとなった孤児院、ストロベリー・フィールズの前に立つ。少年時代のジョンは、祖父が子供の頃いたこの孤児院で自転車を降り、座り込んでいたらしい。私も同じように座り込んだ。



■次に、家々が連なる一画にあるポールの実家へ。ジョンとポールは、互いの家を行き来し、ギターを弾いていたそうだ。ちょっと手前にはジョージの家もあり、行き来していた姿が目につかぶ。



■ビートルズ4人の実家を訪れた最後に、ジョンの実家へ。私は、門の前で手を置き、ジョンの子供時代に思いを馳せた。2階の左隅がジョンの部屋だった。17歳の頃、彼とポールはこの部屋で曲を作った。私はこの部屋を見て、そして天を仰いだ。その時、窓を開けてジョンが私を呼ぶような声がした。「おい待ってたぞ。よく来たなモンドくん・・・」。そして、私はこのとき気づいた。ジョンが部屋から見ていただろう通りの向こうに一体何が見えるか・・・そして遠くを見つめた。



■1957年7月6日、ジョンとポールが会うセント・ピーターズ・チャーチへ。ジョンがリバプールの祭りの日、トラックの荷台で演奏していたのをたまたまポールが見て、会話が始まり、意気投合したのだった。





■次に訪れたのは、ジョンが通っていたクオリー・バンクハイスクール。ここで最大の奇跡が起きた。**MIRACLE2**

正門の扉を閉めようとした守衛に「この高校はジョンの高校？」と訊ねると、「Please come in」と言って中に入れてくれたのだ。校舎の入口の前に立って、この入口をジョンが毎朝、通ったのだと思うと胸いっぱいになる。



■守衛だと思ったら何と数学の先生だった。彼に導かれて体育館の倉庫へジョンが日々使用した階段で上がり、ジョンも座っていたであろう体育館の2階席に座った。



■ジョンが通っていた当時の看板や、彼が映っている大きな写真パネルを出して見せてくれた。そこにはまぎれもなく17歳のジョンがいた。(写真右、上から2段目中央のリーゼント頭)「ようこそモンド、俺の青春時代へ。よく見ていってくれ」。そう言われた気がした。後で知ったことだが、この奇跡を起こしてくれた守衛は、元数学の教師だったようだ。



■校長室への入室も許された。ジョンはここで、校長と言葉を交わしたことはあったのだろうか。ジョンの教室は吹き抜けの2階、彼が3年間座って、時に教師に叱られていたであろう席を教

えてもらおうと、ジョンになりきって手を挙げた。



■ クォリー・バンクハイスクールを出ると私は、タクシーの運転手に「リバプール全体が見える丘へ案内してくれ」と告げた。30分ほどして連れられた丘からは、夕陽が落ちて紫色に染まったリバプールの街並が広がっていた。さらにリバプール美術館前へ。赤くライトアップされた世界に身を置いて、私はすっかりジョンの故郷の街に染まっていた。



2018.10.23 火

■そして私は日付を越えその夜、ジョンが17歳のときに交通事故で亡くなった彼の母・ジュリアの夢を見た、不思議な体験だった。



■朝起きると私は、現地のカメラマンに「ジョンの母・ジュリアが眠る墓を探してほしい」と頼んだ。そして朝食をとると、ジュリアが眠るアラートン墓地を目指した。しかし、その墓地はあまりに広大で、誰もどこにジュリアが眠るか分からない。



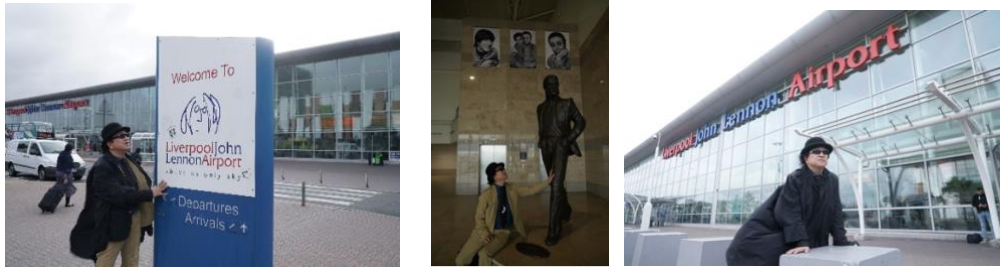
このとき、カメラマンが墓地の管理人に私の思いを伝えると3つめの奇跡が起きた。

### **MIRACLE3**

管理人がジュリアの墓がある場所を教えてくれたのだ。私は、その奇跡に感謝しながら、iPhoneでジョンが作った「Julia」を流して、ジュリアの冥福を祈った。そして静かに、今回の音楽劇の企画書を墓前に置いた。私は、涙をいっぱい流しながら、思いきり「Julia」を歌った。

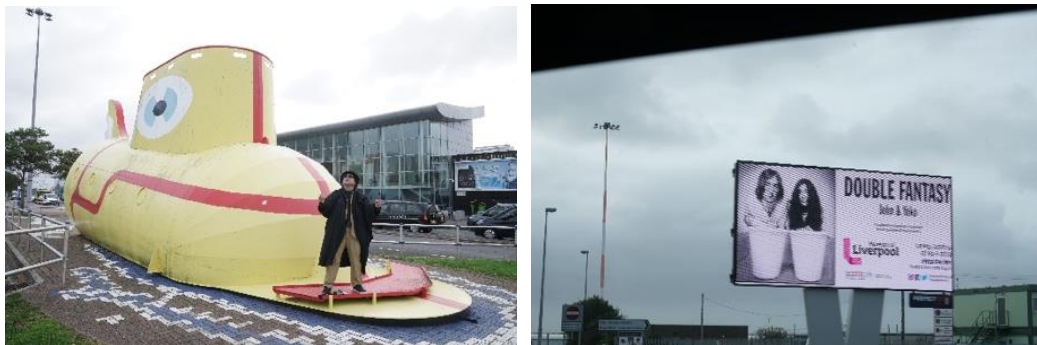


■感動の時間を過ごした後、リバプール・ジョン・レノン空港へ。



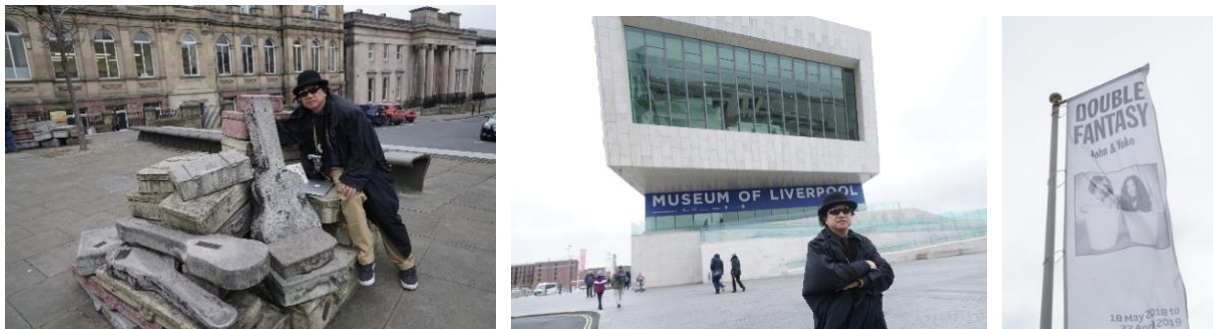
2002年7月25日のエリザベス女王陛下のご臨席を賜った空港オープンの日銘板を見つけた。この空港の名付け親は、他ならぬ女王陛下であったという。空港内にはジョンのブロンズ像があった。その足にさわった私が見上げると、そこにはジョンとヨーコのツーショットの写真があった。この像が披露されたとき、ヨーコはそこにいた。

■空港の外にはビートルズの曲「Yellow Submarine」にちなんだ黄色い潜水艦があった。もちろん私はここで「In the town where I was born ♪」と歌った。



■私は空港で「Double Fantasy - John & Yoko」という展覧会の看板を見つけた。そのときタクシーの運転手が、4つ目の奇跡を届けた。**MIRACLE4**  
「いまリバプール博物館でやってるよ」と教えてくれたのだ。飛行機の搭乗時間まで1時間ほどあったので、私は「その博物館まで行ってくれ」と言った。

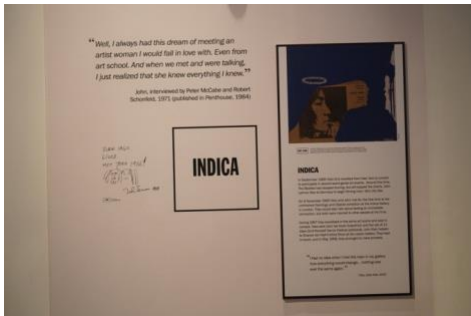
■リバプール博物館に向かう途中、ジョンと最初の妻・シンシアが出会った美術大学を運転手が教えてくれた。そこには、ジョンとポールのギターケースの像があった。そこから、ジョンの曲のメロディが聞こえてくるかのような感じだった。



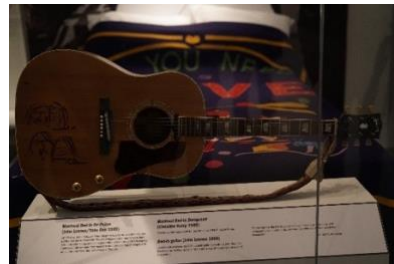
■そして、ようやくリバプール博物館へ。ジョンとヨーコが出会ったインディカギャラリーの個展でのリンゴの展示が再現されていた。そこには、出会いのときの思い出を書いた文章とジョンの自筆のサインが添えられていた。



■ ジョンとヨーコの出会いの展示物が並んでいて、本当に奇跡の空間が想起された。

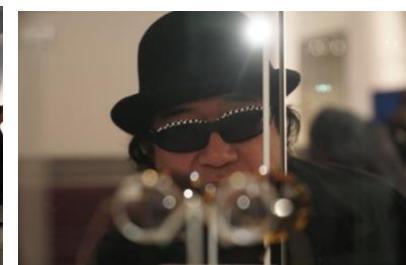


■ メッセージは、「平和を考えて。平和の行動をして。平和を広げて。平和を想像して」と読めた。ヨーコの言葉だった。二人が実際に着たシャネルの結婚衣装を目にしたとき私は、身が震え、涙でうちひしがれた。



■ そこにはジョンとヨーコが新婚旅行で行ったモントリオールのホテル、フェアモント・ザ・クイーン・エリザベスで行われた「ベッド・イン」イベントで使われたベッドも置かれていた。それは平和を考えることをテーマに、1969年5月26日～6月1日まで行われた。ギブソン J160E も展示されていた。二人はここで「GIVE PEACE A CHANCE」をライブレコーディングしたのだった。

■ 「New York City」は、1972年にヨーコと共同名義で発表されたジョンの生前唯一の二枚組アルバム「サムタイム・イン・ニューヨーク・シティ」に収録された。そんなことを思い出した。ここでは、ジョンが愛用した眼鏡も紹介されていた。



■ 私は、ジョンが眠るイマジンサークルのレプリカに祈りを捧げた。





2018.10.23 TUE LONDON

■ジョンやビートルズのメンバーの足跡をたどった旅の終わりには、テムズ川河畔にある観覧車、ロンドン・アイを眺め、最新のロンドンをこの目に収めた。

■夜 9 時の搭乗時間の前、BBC(British Broadcasting Corporation)に行き、「Live at the BBC」と書かれた壁に触って、再び歴史をさかのぼった。

ビートルズはここで、デビュー前の 1962 年 3 月 7 日の収録(翌日放送)をスタートに 63 年 6 月 4 日の Pop Go The Beatles など多くのラジオ出演を行った。



■ロイヤル・アルバート・ホール。このヴィクトリア女王の夫君であったアルバート公の記念会堂として完成した格式あるホールで、ビートルズは 1963 年 9 月 15 日にデビューコンサートを行った。恐らくそれは彼らにとって、夢のような時間だったに違いない。

今回の旅の最後の地は、くしくもジョンと、そしてビートルズが、熱いハートを抱いてビートルズメロディを発信しようとした場所だった。

今回の「ジョンとヨーコの物語 ヌソムルモンド～僕ら地球人」から、私たちが目指す“未来想像”の旅もまた始まる。ヒースローへと向かうタクシーがハイドパークの中の池の脇を通るとき、こんな大きな始めてみるというほどの満月に遭遇した。まるで私を見送るかのように・・・

